

時事新報

明治廿四年八月十九日
舊曆辛卯七月十五日
(丁丑)

西曆一千八百九十二年
月出午前六時二十六分
入午前七時三十六分
午後四時五十三分

○皇太子殿下音無山御登覽 皇太子明宮殿下には去る
十四日御旅館御出門の上、館の背後ある音無山へ御遊
歩の爲め御登覽あらせられ近頃まで現存したる伊勢三
郎物見松の舊跡近傍を御逍遙あらせられ御學友と共に
聲朗かに軍歌を奏し給ひ五丁計りの頂上に至るまで御元氣勇ましく御登沙遊ばされ暫時御休憩の後同七

私銀行金融會社は其の資本金十五萬圓にして郡中諸

たる財產家寺崎至、井合孝左衛門、池原平十郎諸氏が

同社に對する負債の總高五萬餘圓に及べる事を發見し

目下非常に紛議中ありと云へり

○新潟縣私立銀行の紹識 新潟縣西頸城郡絲魚川町の

御起設立したるものなれば其信用も他の私立銀行に越

えて堅固なるにぞ郡中各學校の資本金を其の株式とせ

し程の勢なりしが本年七月より舊頭取たる寺崎氏が

同社に對する負債の總高五萬餘圓に及べる事を發見し

目下非常に紛議中ありと云へり

○岩手縣夏蠶の近況 同地方本年の春蠶は發育頗る宜

しく好結果を得たりしが夏蠶は氣候不順の爲め收穫も

如何と養蠶家の氣遣ひ居る所の多し

○夏蠶の不作 相州大佳愛甲等各郡夏蠶の模様を聞く

に本年は非常の不作にして蘭取上り高は平年の半額若

くは三分一位の見込にて甚しきは皆無の處もある由あるが右は三四眠頃温熱不定にて謂ゆる陽氣當りの爲め

なりと

○石炭の成行如何 我國產出の石炭は一箇年凡そ二百

五十萬噸にして國內の消費高は百萬噸内外なり左れば

五百萬噸は年々需用に超過して出產するものあれば

若し之れを外國へ輸出するに非ずんば需用供給の不平

均より其價を下落せざるを得ず幸にして上海香港等に

需用の途ありしかば左程の下落を見ざりしより今や筑

らしむる所あれば國家は宜しく其氣運を察して緩急を

付し更に劣る所あけれども當局者は又往々說を爲

して民間に一任するときは人民は子弟の教育を等閑に

視し更に劣る所あけれども當局者は又往々說を爲

して民間に一任するときは人民は子弟の教育を等閑に